

小西甚一著「古文研究法」洛陽社 1955年9月10日刊を読む

古文の勉強とは

1. ながながと古文の勉強について述べてきた。辛抱して終りまでよんでくださった諸君に、あつく感謝したい。というのは、この本を私が書いたのは、入学試験の対策なんかだけに役立てようとしたわけではなく、試験勉強というやむを得ないしごとに対処するうち、いつとなく古典の正しい理解を身につけるところまで行ってほしいと念願したからである。
2. 自分の国の古典というものは、民族の宝である。りっぱな国のりっぱな人たちは、みな自国の古典について深い理解と高い誇りをもっている。イギリスでも、フランスでも、ソ連でも、中国でも、古典はたいへん尊重されている。古典を尊重しないような国は、下等な連中しか住んでいない国だと考えてさしつかえない。ところが、戦後の日本では、古典を軽視することが進歩的であるかのような誤った考えが横行し、西洋の近代芸術をまねることが日本を世界的にするとでも考えているらしい人たちは、高校の教科課程から古典をひどく減らしてしまった。そうして、悪文の標本としか思えないような舌足らずの現代文が入試問題に登場し、吹けば飛ぶような三文作家の名が、人麻呂や紫式部や芭蕉とならんで出題されている。こんなばかげた話はない。わたくしは、一年半あまりアメリカの大学で比較文学という研究をしていたが、その間、自国の古典がどんなに尊いものであるかを身にしみて悟らされた。西洋では、どれほど古典が尊重されているか、よく日本人ぜんたいで考え直してほしい。近松門左衛門の著名な作品について何事も答えられなかった日本外交官が、国際的な恥をかいた話もあるのだから。
3. しかし、日本の古典には、いま若い人たちが情熱をもってよみふけることのできるような作品が、残念なことに、あまり多くはない。だから、いま無理に興味をもちたまえとは奨めないつもりである。若いうちには、すぐれた翻訳小説にでも熱中するのがよろしい。外国の文化について無関心な人は、とてもこれからの世のなかに活動できるものでない。だが、すこし人生の経験をつんで、社会の重要なしごとを受け持つころになると、どうしても日本の古典へ帰らざるを得ない。また、そのころになると、古典の味がほんとうにわかってくる。ところが、古典は、現代語で書かれていない。現代語訳でも、ある程度までは古典を理解できないわけではないけれど、結局、原文以外は古典でないのである。そのとき、原文でよむだけの語学力や基礎知識がないと、手も足も出ないわけだが、それは、若いときでないと、身につけることは非常にむずかしい。頭の柔軟な青年期に、しっかり勉強しておけば、いつでも知識は再生してくる。私がこの本で述べた程度のことを、いま身につけておいた人は、生涯、古典を友とすることができるであろう。
4. 『徒然草』に書いてあるようなことは、諸君をあまり同感させないだろう。しかし、二十年の後には、きつとうなずくにちがいない。同感できないものは、いま無理に同感するにはおよばない。それは、青春をゆがめるだけだから。しかし、青年期の感じかたが唯一のものだと思っただけではない。諸君の前には、まだまだ未知のひろい世界がある。そのひろい世界にわけ入

るため、私の書いてきたことが役に立つならば、私は、たいへんうれしい。

P427 ~ 428

[ コメント ]

何のために古文を学ぶのかを根本から考えることは古文の勉強の励みとなる。高校での古文の勉強を基礎にして、一生涯かけて折に触れ古文に親しむことが人生を豊かにする。苦しい時に助けられもする。人生の成功に役立つ。日本人としての教養は古文にもあると考える。

- 2009年6月3日林明夫記 -